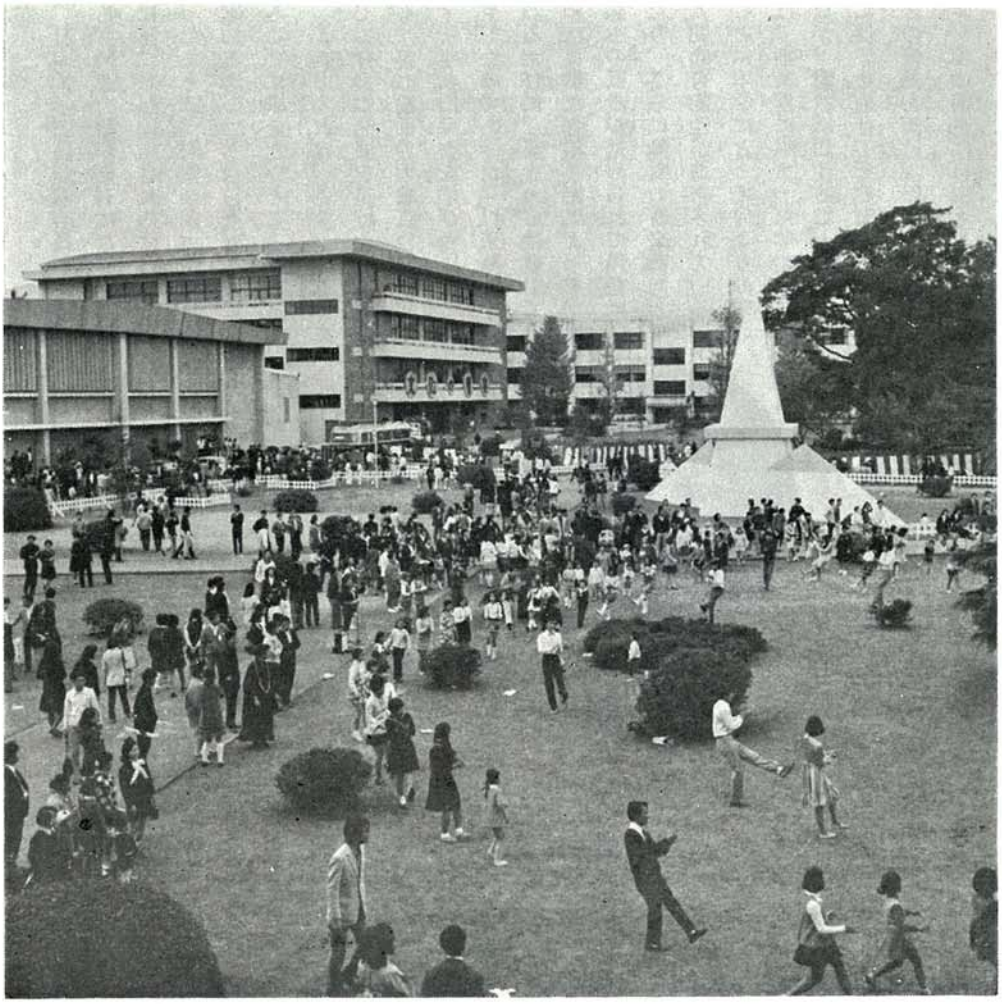
日本大学 三島
同窓会々報
第 2 号
昭和47年 4 月20日
静岡県三島市文教町 2
日本大学 三島 同窓会 発行



第21回大学祭

昭和四十六年度総会と開設二十五周年記念祝賀会を開催

日本大学三島同窓会総会並に開設二十五周年記念祝賀会は、第二十一回大学祭三日目の十一月三日に六十余名の会員を集めて開催された。

総会は、午後三時より記念館で行なわれ、種房会長の挨拶の後、遠藤逸雄氏を議長に選び議事に入った。本年は役員改選がなく、事業、決算の報告並に事業計画、予算の審議のみにしぼられ、次の事項を可決した。

一、事業、決算報告（八ページ報告書参照）

一、事業計画、予算案（八ページ項参照）

（附）同窓会財政状況について

一、小委員会報告

(1)奨学金を一名宛二万円に増額する。

(2)会報第一号発行に引続いて第二号を発行する。

(3)学園歌集を引続いて発行する。

(4)名簿作成については非常にむづかしいので、各パートの発行に際して援助する。ただし、同窓会全体としても発行するよう努力してほしいむね希望があった。

(5)会費増額については、学内事情もあり、簡単に実施できないので、今後とも大学当局と連絡をとり、実現に努力する。

一、小委員会は任務終了にともない一応解散し、今後は常任幹事会を中心に推進して行く。

総会終了後、午後五時より記念館内で、安藤、鈴木、玉津三先生をはじめ十数名の先生方をお迎えし開設二十五周年記念祝賀会が、盛大に挙行された。同窓生は予科の一期生から本年卒業の若手まで、各科出身さまざまで、なごやかな会は午後七時近くまで続いた。終ってグループ毎の二次会が行なはれた様である。

なお、今回の祝賀会は急に計画されたため十分な連絡ができなかったり、音楽部OB会の様に従来の懇談会の形で当初時間調節をしてあったため、参加できなくなった方もあり残念であった。

日本大学三島合唱団OB会発足

さる第二十一回大学祭は本学園開設二十五周年を記念するものであったが、本学園の歴史と共に歩んできた音楽部はOBも多数にのぼり、四十二年六月には二十周年を祝って集り、その後名簿の整理を続けて、ようやくOB会発足にまでこぎつけることができた。

十一月三日大学祭終了後、第一回総会を開き、引続き大学より安藤文理学部次長と岩城学生部長の御出席を仰いで、盛大な合唱団二十五周年記念祝賀パーティーが開催された。

鈴木事務局長顧問に就任

日本大学三島学園の事務局長として、三島学園開設以来、学園の発展に尽力されてきた鈴木昇六先生が、今般退任され、三島学園の顧問に就任された。三島学園が今日の隆盛をみたのも先生のお力によるところが大きい。

種房会長大阪支店長に栄転

同窓会長種房繁氏は勤務先の東洋醸造株式会社の二月の定期移動に伴い薬品営業部次長よりこの度大阪支店長（部長待遇）に栄転された。

大樹への成長を期待する

玉津徳太郎

日本大学三島同窓会員が待望する、同窓会報が発刊になり、ここに第二号が編集されるはこびとなったことは、同窓会創立期の事情を知る者の一人として、まことによろこびに堪えないところである。

かえりみれば、創業二十五年にして今日の発展を遂げた三島学園も、第二次世界大戦直後の昭和二十一年に旧兵舎を学び舎にして誕生したのであった。以来星霜を重ねるたびに、集まっては散じていった真摯な青年学徒によって、理想への巨歩が進められて現在にいたり、さらに無限の将来に向って人間的可能性が追求されている。ことに本学にとって何よりの幸いは、創業期に集まった学生・教職員が、窮状に屈することなく、常に理想を描き、その実現にひたむきの情熱を傾け、堅実な方法で一歩一歩の前進に自由とよろこびを感じ合える人びとであったということではなかろうか。こうした人びとの気魄と雰囲気は代々承けつがれて学風となり、立派な伝統をかたづくっているように思われる。それは今日にみられる学生諸団体の活動、諸行事などがいずれも創成期諸先輩の築いた土台の上に積重ねられ、洗練されたものとみられるし、さらに亦、創立以来毎年続けられている同窓会の集りに参加する会員の意気込み・躍動ぶりなどが如実に、この伝統を物語っている。

ここで思出されることは、本会の土台作りにおける、諸先輩の英知と苦心談である。

いうまでもなく、本会は三島学園学生会の創立期の学生役員、とくに種房繁氏、長田渉氏、奥田吉郎氏などの学部卒業時の提唱により、昭和二十八年十一月三日の大学祭に、結成総会をもって創立されたものである。こうして創立の第一声があがると、旧制予科会員の問題をはじめ、混乱期の各種問題が錯綜して、統一活動には一方ならぬ苦労があった。この諸問題を背負った初期の役員諸氏は、英知というか、問題解結の切札というか、当時の三島教養部長秋葉先生を会長に推戴し、卒業生代表を幹事長として、統合の実をあげることができた。その後は会も落付き年間事業も予定通りにはこび、秋葉先生のご他界までお世話になったことは周知の通りである。

また、本会運営の基金である終身会費制についても、その徴収について難関があった。会は成立したが、その運営資金としての会費をどうするかが、初期数代自治会の大問題として課せられた。一期から三期まではすでに三島学園を修了していたので、四期の辻省二委員長を中心とする自治会が、これを提案し、五期の谷越伍一委員長結城勇一副委員長の時にようやく決定した。この決議により次年度からは大学の学費納入期に委託徴収することになり、本会の財政基礎も固まったのである。当時の本会役員並びに学生自治会委員の献身努力は並々ならぬものがあった。諸氏の労苦と、功績はまことに称讃にあたいするものと言えよう。

こうして本会の基礎は確立され、今日では基金六百万円を数えるにいたり、昭和二十八年に植えられた若芽もやがて二十星霜を経ることになり、若々しい大木になってきた。ことに本会は三島学園の続く限り年々歳々新人を加え、ますます亭々たる大樹に成長することが期待される。しかし大樹になるための栄養はなによりも会員個々の発展と相互の親交のほかにはない。この親交は先輩と後輩の人間的英知と友情による、「忘年の交り」にある。時代はますます流動的に多様化しつつある。この世相においてこそ、同じ学窓で学んだ絆を縁とする年にこだわらない親交が新時代に処する、強力なエネルギーを作り出すのではなかろうか。

お互いに青春の一ときをすごした学園を基磐とする大樹を想望して、大成されるよう祈念して擱筆する。

（文理学部（三島）教授・付属三島高校長）

商経科二部同窓会開かれる

商経科二部同窓会は昭和四十七年一月二十九日（土）約五十名の出席を得て三島校舎八号館で開かれ、議事は恒例の報告事項と後輩誘致問題のほか、名簿の作成と規約の改正が提案され現幹事が中心となって会員の中から新たに小委員会を編成し問題の処理に取り組むことに決った。

後半の懇親会は昭和二十七年三月卒業の第一回生から昨年三月卒業の第二十回生まで、孫もあるオジサマから結婚適令期のお嬢さんに及ぶ変化に富んだ顔ぶれに、諸先生方をまじえて大変賑やかな会となった。

内藤正昭幹事南極観測隊員に

本会幹事である、内藤正昭君（日本大学大学院理工学研究科博士課程建設工学科在学）は第十三次日本南極地域観測隊員（夏隊）に選抜され、去る十一月二十五日東京晴海埠頭より壮途についた。同君は昭和三十九年三島校舎（理工学部）に入学し、学生会会計監査・クラス委員として活躍し、移行時には同窓会より奨学金を授与された。その後研究に精進されたので今回の栄をになつたものであるが、現地昭和基地では、基地内の施設建設指揮と基地建物の調査研究（変形・建物国有移動係数・建築材料の現状・特殊建物の熱伝導係数）を行なう。

三島教養部二期同窓会

十二月三日三島市川原ケ谷「リオ・ドライブセンター」で開催され二十八名の出席を得て盛況哀に終了した。二期同窓会は、予科時代を含めて三年間三島学園に在籍したため結束もかたく、同窓生の消息もその大半が掌握されている。幹事の木村幸夫君（三島商工会議所）勝又敞充君（箱根登山鉄道）が中心になり三ケ月に一回同窓会を開催している。

想い出

西村美枝子

日大三島予科が女子に門戸を開くと聞き、嫁に貰い手が無くなる、と反対されつつ白線黒マントの仲間入りを致しました。校庭は身の丈程の夏草、教室は木造、構堂は元大砲の置場で広く暗く寒くはあったけれど皆知識欲勉学心に燃えて居ました。軍隊帰りの生徒が多く、服装も年令もまちまちで空腹を抱えながら文学哲学を論じ合って居ました。封建男児も多く「何で男の学校に来たか言え、ストームもさぼるな」と説教され何でも男子と一諸に致しました。今共学して良かったと思ふ事の中に、男性が物事を論理的大局的に考え、発想もダイナミズムであり機動性があるのを知り、大時な時には男ならどうかと角度を変えて考える様にしています。顧みて、秋葉先生、担任の玉津先生始め熱意溢れる諸先生方、親切な事務の方々に心から感謝致して居ります。分け合って食べた弁当、クラス対抗の催しや遠足、大学紛争、大学祭、西村さんのコーラス明け暮れ走り廻ったラグビー部、三年間の自治委員を終って進学する時答辞を述べた事、想い出は書き尽ません。恩師と個性ある沢山の男の友達に囲まれ、初の女子学生として学園創生期に学び得た事は、世の中が混迷の時代であっただけに倖せな青春であったと思います。二十余年経った今、各界に活躍する友の消息を同窓会を通じて知る事はとても嬉しく、楽しみにして居ります。

（昭22・23年度在学・旧姓長谷川）

全学ピクニックをお膳立てして

芹澤克治

「如何なる社会にも倫理がある」玉津先生から御指導いただいたのが昨日の感がしてなりません。昭和二十四年春、新制教養部スタート富士北麓から馳参じ、二十八年社会人として山梨に就職したわけですが、私の履歴に三島在学と書いてないのに、山梨出身でありながら会社（富士急行）では、静岡地区で修業の十年を過ごしました。吉原、吉士宮、沼津、そして管理職の第一歩が三島営業所長と、全く私と三島は忘れ得ぬ、そして、離れられぬ縁があるように思えてなりません。

バス会社の営業マンは、地理不案内では、務まらず、また地元の皆さんと交渉が上手でないと失格なのに、異国の静岡が、富士宮の石野君、滝川先輩、富士の服部君をはじめ、学友各位がバックアップしてくれたことは終生忘れられません。

確か三十二年富士宮で勤務中、石野君から激励されたのが、今では恒例の全学ピクニックの『一社で実施しろ』というアイデアでした。

当時三千人からの後輩ピクニックは四社で編成され実施してゐたものですが、六十台以上の観光バスをつらねることが可能なりや、心臓も強かったが実際に不安この上もありませんでした。実は山梨地区の営業マンも協力してくれ、山梨の車両も回送させて実施したことをおぼえております、校歌を先導の宣伝カーが知らせながら、グリーンベルトの富士急カラー一色の六十数台をつらねての全学ピクニックは、実に壮観で、担当した私は、母校のためになった喜びと、社員としての誇りとが交錯して、感きわまるものがありました。

早や十数年、毎年つつがなく実施されているとのニュースを社内誌で見るたび、ただただ感ひとしおのものがあります。

（昭和24・25年度在学・富士急トラベルKK・常務取締役）

私の履歴書

―下宿の想い出―

安東安生

私が三島学園に雄として入学したのが昭和二十九年四月であった、大分県で公務員生活を二年間送ったのち向学の志断ち難く、今は母校三島学園に入学したのであった。

然し乍らそこに待ち受けているものは理想とはかけ離れた学園風景であった、九州の片田舎で育った私の目に映るものは毅然とそびえる富士の姿だけであり、校舎は兵舎の名残りを充分に残していた、私はものすごい焦りを感じ始めた。析角合格した国家公務員試験や地方公務員試験を棒にふり進学したからである。私は猛然と勉強に取組んだ、四年間の長期計画を立案し、同宿の先輩に相談したりして頑張った。然し何分にも下宿の待遇が悪く毎日栄養価の低いものばかりで、遂に病気になり東海道線の下から裁判所前あたりの昇坂を登校するのもきつくなる程体力は衰した。そこで思い切って自炊生活を決心し、校庭の北側の幸原に部屋を見つけた、農家の納屋の二階を改造した部屋でベニヤ板を張りつけた簡素な部屋だった、階下は馬小屋と農作物をとり入る納屋で二階の一部は藁小屋になっていた。大家さんは大変親切な人で家族全員で私を歓迎してくれた。野菜は全部くれるし、三島名物のサツマイモも沢山食べることができた。納屋の中にあるサツマイモは自由にとり出して食べてよいことになっていた。

深夜になるとどうしても空腹になるので、好意にあまえて納屋からサツマイモをとり出し、フカシテ食べたものである。イモとサンマでどうやら体力は回復した。今にして思えば哀れな生活であったが想出は尽きぬ佳き三島時代である。

（昭39・30年度在学・津久見市・戸高鉱業社経理課長）

学友会誌

吉野洋一

大概に感動の薄い小生にとって色浅せたこの小冊、しかし、それをこうして一枚一枚捲ってゆく度にその中から臭う黴の臭いが、非常に快く十数年前の三島に引き戻していってくれるとは夢にも思いはせなんだ。

原稿依頼を受け、日々思う事を思いつつ並んだ本棚からふっと「学友会誌十二号」が目に止まり読み出したのが懐古の始まりである。

あの佳麗なる大学祭を中心とした諸々の行事を通じ、又、国論を二分した安保問題や浅沼の死を通じ、それらのいずれにも敏感で純粋に、いかなる打算もなく、真剣に取組んだあの頃の青春の血がこの細やかな小冊の中から飛び出して来たと表現しても些かもオーバーではあるまい。幾度となく語り明した広小路の下宿を思い、肩を組んで希望の森の歌碑に上がり寮歌を歌った冬空の戯いない思い出が、ただただ懐しさのみでいっぱいである。

そう言えば玉津先生が常に口にされた言葉を思い出す。「その場のよき構成者たれ」と、そしてこの事の難しさをもよく教えていただいたものだ。今再び私なりの立場で思うときその言葉の本有が消化しきれたように思う。

「ひとつの集団がまとまっているということは、その構成員の全員あるいは、大部分が集団を自分たちのものと意識し、これに所属することになんらかの誇りと満足をおぼえる状態を意味する。もともと個人がある集団に参加するのは、その集団のもっている価値や行動様式を認め……云々」（玉津先生著学校行事と学生活動から）理在、よりよき構成者たらんと努める毎日ではありますが、日大の中でも最もアカデミックな三島、そして私だけでなく、大多数の同窓がその中にノスタルジアを感じるこの学部に私の過去があった事を幸いに思うものです。

（昭和35年在学・山崎製パン株式会社総務課長代理）

女系家族

平井千枝

光陰矢の如し、昭和三十四年、日本大学が七〇年の歴史を飾った年に栄養科が新設、私共はその第一期生となりました。栄養科長は今は亡き秋葉安太郎先生。「学部としての女子教育は初めてだが良き母親としての研鑽を積んで欲しい」と食物教育を通して女性の将来を展望しひものでございました。

あれから十余斗、桜栄会（家政科卒の会）も千五百名を数え、諸女性花ざかりの子育てに専念しております。〃いつの世にあっても母は太陽である〃数年前、羽田に恩師を見送った折、お元気な秋葉先生にお目にかかりました。先生の御家庭も女系家族、我々亭主族は常に脅かされているんだと話され、女の御子様だった為、御孫様も早く得られ、したがって「七十才にして会孫を得たんだが、これはあくまで内証だよ。孫として呼ばせるんだ」と艶やかな頬を少し染め、好々翁の面々を如実に物語っておられました。若々しかった先生にその後お目にかかれたのは日大紛争の激化でブラウン管を通してが最後でした。

今年で生、三回忌を迎えます。建学の文、好々翁であられた秋葉先生の御冥福を心より御祈り致します。

自治会の役員をしておられた御供さんを創刊号でお目もじ、秋葉先生を中心とした当時の皆様方との思い出が蘇えております。私も目下、子供病人、大人病人の相手を業として今日より更に進んだ明日であり度いと念じつつ歩んでおります。お元気で!!

（昭34・35年度家政科在学・東京医科大学病院栄養主任）

大学祭の思い出

杉山一明

三島時代の男い出は沢山あるがその中でも大学祭の思い出が一番印象的である。とにかく皆職業人でありその職場では相当の位置を占めている仲間が多かった。昭和二十六年四月思っても見なかった日本大学へ友人堀沢君と仲良く籍を置く事になり学生時代を二回もやったのだから女房の奴もあきれ返っていた。「おい！大学祭で二部学生の心意気を示すんだから今夜は帰らないよ」と言うと「若い人達も沢山いるでしょうに、四十を過ぎた人が今さら……」と騒くのをしり目に「なあに歳をひっくり返せば二十四だ、そんなら大学生相応の歳だろう」とうそぶいて出掛けた。当時の職場は沼津市立大岡中学校であった。

一年生のときは昔流に先輩に遠慮しておくとなしくしていたが二年生になってからの大学祭であったので少々気負っていた。相手の副委員長今関君は国鉄職員でこれも亦素晴らしいがんばり屋であり、二人のコンビは良く、馬が合っていた。「今夜は帰らないよ」と言ってはきたものの遅くも帰るつもりでいたが飾り付けに手間取り夜半になってしまった。そこで机を寄せ合って臨時の寝台をつくり仮眠する事とした。仕度をしているところへ体育の服部先生が現れたそして俺れの所の布団を貸すから取りに来いと連れていって呉れた。

聞く所によると先生は若い時沼津東高校（当時の沼中）時代今関君と同窓であったと言う、それで恐縮し乍らずもずうずうしく先生の布団を借りて机の上の寝台に二人で寝たが寝相の悪い私は二面も床に落ちてあった。今思い出してもつい昨日のような気がする。母校と共に忘れられない懐しいものである。

（昭26・27年度商経科二部在学・沼津市立あしたか学園勤務）

三島の思い出

柏淵　順

三島とは、第二の故郷と思っているのか、三島を通過する時は、必ず大学の校舎の方を見るのは、多分、駿河台より強烈かつ、深い印象を受けた為であろうと考えている。

一年目の入学式・全学ピクニック・山中湖でのクラブ合宿、大学祭、体育祭と自然環境に恵ぐまれた学園生活は、灰色の高校時代を忘れさせてしまった程、楽しい日々であった。二年目に入り、経済、法学部より発端した大学紛争の火の手は、三島にも及び、変則的で息の長い校外又は、細々とした校内授業の推進と平行に収拾の為の大学・学生双方の他の学部には見られなかった前進的な努力である。さらに、これらの相反する二年間の学生生活で決して忘れられないのは、工科の学生ばかり三十名程で寝起を共にし、時には、夜が明ける迄語り合った函南寮の寮生活であろう。

この思い出深き三島学園生活より得た事の中で、私の脳裏に強く焼き付いている言葉に、機械科の善田主任教授のモットーである、「和」と言う事である。「人の和」あるいは、「物事の和」と言う物は、待っていたのでは出来ない、自分から進んで作る様に努力をしなければいけないと言う事を、三島に来た当時、ひよわな男と見られていた私に、体験する機会を与えられたことは、これからの、長い人生に必ずや、役立と信じているしだいです。

（昭42・43年度機械科在学・日立プラント建設KK勤務）

国文一期生として

伊藤　真紀

日本大学三島が、二十五周年を迎えられたとのこと、心より御祝い申し上げます。私が日大三島短大文科国文科一期生として入学致しましたのは昭和四十一年四月でございますから早四年の月日が流れたのです。富士山の美しい姿を目の当りに見る事の出来る素晴しい自然環境の中での二年間は、勉強のことはさておきましても、思う存分の学生時代であったと思っております。と同時に三島の地は私にとって大切なところとして心の一部を占ることになったのでございます。

三年ほど前の学生運動の嵐は、当然であるかの様に三島学園の上にも吹き荒れましたが、私は当時二年間生活した寮のことや、いねむりの出てこまった教室のことが心配でたまらず、三島まで出かけたことがございました。かたく閉ざされた門の外からのぞき見た学園内は、アジビラが所狭しと貼られ、窓ガラスは破られ、荒れておりました。そんな校舎を見た私は、学生運動の良し悪しは別にして、ただ学園をあの様にしてしまった人々に激しい憤りを感じたのでした。その学園も、静けさを取りもどし、今年の八月に訪れた時には、四年前と少しもかわらぬ静けさで、ただ変わった所というば事務所が素晴しい建物になっていたことだけでした。ゆっくりと学園内を歩きながら、当分訪れることが出来なくなるのを淋しく思い、学生時代の思い出に浸って帰って参りました。いつまでも平和で美しい学園であることを祈りつつ……。

（昭和41・42年度文科国文在学）

日本の前線

飯村とよ子

今の季節は、私が四季前線と名づけているうちの新雪前線の始まりである。これは北海道から始まりやがて青森の岩木山、八甲田山、岩手の岩手山、秋田の鳥海山、福島の盤梯山の頂きに達し、徐々に南下し日本の三千メートル級の山を白くしやがて九州最高峰、屋久島の宮之浦岳に到るのである。次は表前線で筑紫から薩摩から初まりそして北に移り始める。次はレンゲ前線、これは鹿児島から四国の高知に移り瀬戸内海南紀へと大地をレンゲ色に染めていく。これが終らぬうちに訪ずれるのが菜の花である。これも九州に始まり本州に移り東北に移り進んでゆく。そして若葉もまだかすみの新緑前線なのである。北海道はレンゲ、菜の花、桜、新緑と一度に四つも五つもの前線が到来し、やがて日本の一番先の紅葉前線を迎えるのである。

このように日本の四季の移り変わりを一万メートルや三千メートルの上空で楽しみながら月日と飛行時間を重ね、月日は五年余、時間は四千時間をこえているG4と呼ばれる航空路を東から西に飛ぶと、羽田離陸後約十分で伊豆半島上空に達する。箱根から三島、駿河湾へと三十秒も立たぬうちに通過していくのであるが、その瞬時にも懐しい母校の白く光れる建物をみつけては喜んでいる私なのである。（46年11月記）

（昭和39・40年度商経科在学・全日空教官スチュワーデス）

万博と私

浅見　元

私が大阪府に就職したのは、昭和四十四年の春、万国博まであと三百五十余日という追込みの時期でした。

配属された職場は、万国博会場の隣にある千里ニュータウンという世界にも例のない新しい住宅都市を建設しているところであり、寮もこのニュータウンにあるので、今まであまり関心のなかつた万国博が急に身近に感じられるようになりました。

就職試験の時に見学した会場は、土肌ばかり目につく一面の荒地であつたが、この時にはすでにあちこちでパビリオンの建設が始まつていました。

私の最初の仕事は、ニュータウン全体の修景計画、これは千里の完了時期であることと、万博に大くさんの人が訪ずれるので、この街の化粧をすることなのです。

このように私の仕事は万博と係わりあうことから始まつたのでした。

万博が始まると、仕事の方は関係なくなりましたが千里の街にはおおくの外人が集まり、バーに行けば、片言の日本語や英語でお互いの事を語りあい、万博とは有意義なものだと思いました。

あれから一年余、今、会場跡へ行つてみるとすでに多くのパビリオンの姿はなく、ただ緑の芝生の中にかつてのパビリオンの位置を示す、小さな白い標識があるだけです。

しかし、ここに立つと、あの多くの人達、数々の建物が目に浮びます。

（昭40・41年度建築科在学・大阪府企業局勤務）

三島に学んで

吉田　力

新幹線で一時間、東海道本線で二時間余り。この交通至便な事に付け加え、富士箱根伊豆国立公園等風光明微な山河を背に、満たされた環境の元にある三島学園。僕も三島学園を巣立つて一年余りになるが、一旦離れてみると何かしら再度呼びかけるものを三島は持つているのである。それは、三島学園のもつ素晴しい環境と、教師学生が一体となつた親和感がかもし出す親近感であろうと思われます。一方この上ない環境とは対照的に、学生があまりにも居心地が良い為その中に安住してしまい、本来の修むるべき学業を置きざりにしている面は否定できない事と思う。四年或いは二年間の短い期間に専攻の学問を修め、立派な精神を築いてゆかなくてはならぬ大切な一時期を、この素晴しい環境の学園で送れる事はこの上ない幸せである。学生にとつて熱い鉄の如き鋭い刺激は時として必要であろう。しかしながら、それを十分に生かそうとする意志の少ない学生が多々居る事は残念な事である。この事を一口に環境の為の固定化ととつたのでは進歩も発展も望めないだろう。三島学園にマッチした〃日大生〃。これは誰でも願う所である。僕もこの環境の元で二年間を過したのであるが、理由もなく三島は懐しい。しかし残念な事は、〃歩く学生〃に比べて〃走る学生〃があまりにも多い事である。と同時にこれは三島学園の発展上大きな課題であろう。

（昭44・45年度建築科在学・理工学部建築科学生）

思い出のバスハイク（昭29）

回想の学園生活アルバム

第9回大学祭にて（昭32）

…模疑国会風景…

第6回大学祭（昭29）

音楽の発表（昭35）

三島学園のあゆみ

昭和二十一年四月　理事会で三島予科設置をきめる。

昭和二十一年六月　三島予科開校。（旧東海第十部隊跡）

昭和二十二年三月　現校地に移る。（旧東海第九部隊跡）

昭和二十三月十一月　文部次官通達反対・授業料反対で学園紛争おきる（二十四年三月まで続く）

昭和二十四年四月　三島教養部開設（新制大学移行により）。

昭和二十五年四月　短大経済科（現在の商経科）開設。

昭和二十八年十一月　日本大学三島同窓会結成。

昭和三十年四月　岩手医科大学進学課程設置。

昭和三十三年四月　学内機構改革により三島教養部が廃止され、文理学部が発足。

付属三島高等学校開校。

昭和三十四年四月　短大栄養科（現在の家政科）開設。

付属高校に女子部を併設。

昭和三十六年四月　付属高校に工業課程を併設。

昭和三十九年四月　短大工科（建築科・機械科）開設。

昭和四十一年四月　短大文科（国文専攻・英文専攻）開設。

昭和四十一年六月　三島学園開設二十周年記念式典挙行。

昭和四十六年　三島学園開設二十五周年を迎える。

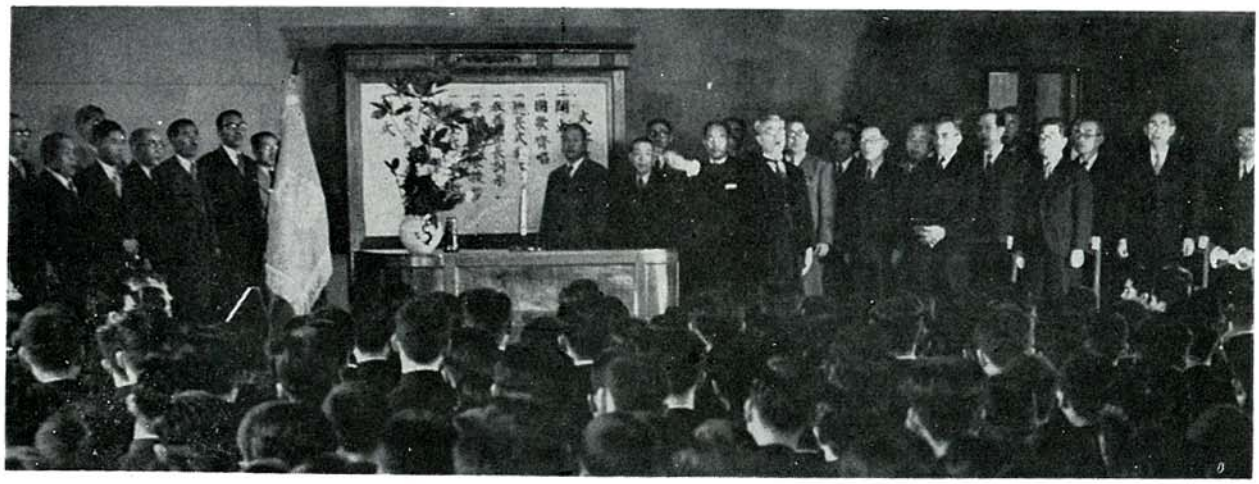
昭和四十七年三月現在

建物　約五一、九五〇平方米

土地　約一〇九、八〇〇平方米。

教職員（専任）数　約三〇〇名

学生・生徒数　約七、五〇〇名



入　学　式（昭28）

富士登山（昭36・7・8）

弁論大会（昭35）

昭和46年度総会報告事項

昭和46年度事業計画並びに予算

収入	
会費収入	600,000
利息収入	320,000
計	920,000
支出	
奨学金	180,000
学園歌集発行費	130,000
各科同窓会祝儀等	20,000
同窓会報発行費（2回分）	140,000
総会並びに記念祝賀会費	90,000
会議会合費（小委員会その他）	30,000
通信運搬費	15,000
雑費	15,000
計	620,000
差引	
（基金繰入額）	300,000

昭和45年度収支報告

昭和45年4月1日～昭和46年3月31日

支出 項目	金額	収入 項目	金額
奨学金（5名）	100,000	会費収入	709,400
学園歌集発行費	92,700	43年度　2,325名	465,000
各科同窓会祝儀等	19,150	44年度　1,222名	244,400
総会費	41,580	利息収入其他	238,985
雑費	5,000		
軽部先生生花料	5,000		
計	258,430	計	948,385
収入超過額	689,955	支出超過額	—
合計	948,385	合計	948,385

貸借対照表

（昭和46年3月31日現在）

借方 項目	金額	貸方 項目	金額
普通預金	56,043	基金	5,556,043
定期預金	5,500,000	前年度繰越金	4,866,088
		当年度繰入金	689,955
合計	5,556,043	合計	5,556,043